

# 『ハマータウンの野郎ども』の現代的視座

— 現代の〈野郎ども〉はいかに社会へと移行しているのか —

尾川 満 宏

(2010年10月7日受理)

The Contemporary Viewpoint of *Learning to Labour*  
— How do today's "Lads" transition to society? —

Mitsuhiro Ogawa

**Abstract:** The aims of this article are to review the studies about today's "lads" in Western countries and get some suggestion for youth studies in Japan. After the publication of *Learning to Labour* by P. Willis, many researchers have studied about lads who are nonacademic, school-disaffected white working class boys seeking to traditional masculinity of working class. However, by increasing of "feminized work" in recent structural change of economy, disappearance of traditional class cooperativity and development of individualisation, lads have had many difficulties to get working class jobs and transition to society. This leads to the question how today's lads seek to transition from "boyz to men." According to the earlier studies, they try to become working class men through the practice or restructuring of traditional subculture of regional working class in new circumstances instead of getting working class jobs. This implication needs us to reveal the meaning of transition from school to job or from "boyz to men" with diversity of each youth and social, economical and cultural context where they live. Then, the perspectives to practice of subculture are very useful to apprehend organically reflexivity, community and identity of youth.

Key words: P. Willis, 'the lads', transition to society, subculture, identity

キーワード: P. ウィリス, 野郎ども, 社会への移行, サブカルチャー, アイデンティティ

## 1. はじめに

本稿の目的は、Paul E. Willis, *Learning to Labour: How working class kids get working class jobs*, Ashgate Publishing Limited, 1977 (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗、労働への順応—』筑摩書房) に描かれたような労働階級少年に関する研究を概観し、現代の労働階級少年が移行期をいかに経験しているか、その諸相を探ることにある。

本書は、イギリスのバーミンガム大学現代文化研究センター (The Centre for Contemporary Cultural

Studies) に所属していた社会学者、ポール・ウィリスによるエスノグラフィーである。そこで鮮やかに描かれたのは、労働階級の少年たちが学校の規範に反抗し、自分たちの信じる将来 (肉体労働の世界) に向かって独自のパスベクティブを確固たるものにしてゆく過程が、実のところ中産階級 (やつら) / 労働階級 (おれたち) という階級構造を再生産する過程である。「20世紀のもっとも壮大な教育研究のひとつ」(Dolby and Dimitriadis 2004) と評される本書に対する反響は、刊行以降長らく続き、その影響力は世界的な広がりをもつこととなった。1981年にアメリカでも出版され、その後フィンランド、ドイツ、日本、韓国、ポ

ルトガル、スペイン、スウェーデンなど世界各国の言語に翻訳されてきた (Griffin 2005)。日本においても多くの研究者の注目を集め、訳書が出版された1985年から数年のうちに「これを知らないとは肩身のせまい思いをする本の一つになった」(山本 1988)。

しかしながら、近年では諸外国の若者による「学校から職業への移行」に関する理論的・経験的研究の知見は日本にも多く紹介されているものの、ウィリス (1977=1996) に続く労働階級少年の社会化過程を扱った研究への注目は、欧米における研究蓄積の豊かさからすれば必ずしも多くない。そこで本稿では、欧米を中心に近年の野郎どもに関する研究動向を整理し、日本の若者研究に対する示唆と課題を指摘したい。

## 2. 『ハマータウンの野郎ども』の概要

本稿の中心的議論に入る前に、〈野郎ども〉the lads とはいったいどういう存在なのかを示しておきたい。

ウィリスが行ったフィールドワークは、イギリス中部のある伝統的な工業都市を舞台にしている。『ハマータウンの野郎ども』のなかで〈野郎ども〉the lads と自称したのは、当該地域のセカンダリー・モダン・スクールに通う白人労働階級出身の若者たちである<sup>1)</sup>。彼らは、教師への反抗やからかい、飲酒、喫煙、逸脱的なファッション、笑いふざけなどを「反学校の文化」として実践する。また、同じ労働階級子弟であるがそうした文化を実践できそうにない〈耳穴子〉earholes→向学校的で向学的、権威に従順な生徒たち→を排斥し、優越感をもって見下す。野郎どもが反学校の文化、なかでもその身体的実践にこだわるのは「それが学校への不服従を表す行為であるからだが、その行為に大人の世界の価値観と行動様式を重ねて見ているからでもある。大人の世界、とりわけ、成人した男性労働者の世界、それが〈野郎ども〉が反抗し結束するときの準拠すべきもの」(p.52)となる。彼らの「成人した男性労働者の世界=職場の文化」に対する憧れ、イメージは、次のようである。すなわち、「異性にかかわる欲望や『大酒喰らう』性癖や『ズラカろうぜ』という暗示や、その他さまざまな感情を、野放図にとまではゆかないまでもほどほどに自由に表現できる場所、職場とはそういうところでなければならぬ。(中略)労働現場には必ず上司がおり、したがって『やつらとわれら』の対立があり、そこにはつねに立場の不確かな中間者がいてやっかいごとを引き込むものである。だから、職場の気風は本質的に男っぽいものとなる。『女々しい』男ではやってゆけない。『テキパキとふるまう』ことが大切だ」(pp.237-238)と<sup>2)</sup>。

このような価値基準を内面化する野郎どもは、いかに学校から職業へウィリスにならえば「教室から工場へ」→移行してゆくのか。「反学校の文化」のもと進路指導からすすんで「落ちこぼれ」、筋肉労働の将来を選び取っていく彼らの進路選択過程は、「学校に『さっさとおさらばする』という表現のほうがよほど実情にあっている」(p.248)とされるほど学校規範から逸脱するものであった。野郎どもに対し、学校は「労働の世界の現実の広がりが(中略)多彩であることを示して、たとえ成績の序列では『底』に位置しても、なお労働において満足を見出しうる多様な選択肢が実在する」(p.221)ことを説く。しかし、学校や教師に反抗する少年たちは、学校や教師への「順応と服従」が自分たちの信じる将来に何ら役立ちそうもないこと、労働の内容はどれをとっても同質であるのにそれを選び職務を生きがいとすることの無意味さ、一部の者だけが成功する条件を全員が従うべきものとする公教育制度の矛盾、を見抜いていた。これらの少年たちの認識をウィリスは〈洞察〉とよび、肉体労働の世界に将来を展望する彼らの「イデオロギーに対する能動的な改竄者」としての主体性を強調している<sup>3)</sup>。「学校を終えた後に待ちかまえる人生は、彼らには疑いようもなく明確であった。彼らは父親たちと同様、底辺の単純肉体労働の世界にはいって行くことを見通し、だからこそ、そういう仕事の世界にとって何の役に立ちそうもない学校の勉強と教師にたいし、彼らは意気揚々と反抗していた。そして、学校をともにサボり、教師をからかい、騒動を繰り広げる仲間たちは、やがて同じ職場に入り、仕事明けや休日をもとに過ごす、一生の仲間であると信じて疑わなかった」(乾 2010, p.65)。

このようにウィリスは、野郎どもが「ほんとうの男」へと成長する過程を彼らの生活世界に寄りそいミクロな視点から描き出した (Willis 1977=1996)。しかしながらそこに提示されたのは、少年から大人の男への移行が学校から職業への移行とほぼ同義であった、1970年代前半の物語である (Bates 1984; Hollands 1990; McDowell 2001)。

この物語を成立させた重要な要因として当時の肉体労働市場の豊かさが増えらる (Jones and Wallace 1992=1996) が、ウィリスはそうしたマクロな経済環境が野郎どもの社会化過程を可能にした点に十分言及していない。しかし、現代の問題に関心を寄せるわれわれはこの点にこそ注意を払わなければならない。1980年代以降の脱工業化、新自由主義化のもとで産業構造は大きく転換し、労働市場から肉体労働が消えた。それにより、労働階級の少年たちには「働くこと

を学ぶこと (learning to labour)』よりも「サービスすることを学ぶこと (learning to serve)」が求められるようになってきた (McDowell 2000)。このことは、かつて野郎どもが野郎どもたりえた諸条件が揺らいでいることを意味している。ゆえに、現代の労働階級少年による進路形成やアイデンティティ、「少年から大人へ (boyz to men)」(Nayak 2003, 2006) の移行は、ミクロな過程でありながら彼らを圍繞するマクロな社会変容を無視しては論じられなくなっている。われわれは、ウィリスの提示した物語を「あの時あの場所のこと」(Kenway and Kraack 2004) と限定的にとらえ、現代の野郎どもに生きられる物語を新たに描き出さなければならない。

こうした認識にたつ本稿では、まず、欧米の議論から近年の社会経済変容が若者たちに突きつけている課題について整理する。次に、そうして不安定化した世界を現代の労働階級少年たちがいかに生きているのか、その諸相を探りたい。

### 3. 欧米における移行過程の変容

それでは、欧米先進諸国における若者の「学校から職業への移行」は今日どのような様相を呈しているのか。まずは、ヨーロッパにおける移行過程のマクロな変容とその性格について概観しておこう。

#### (1) 理論：後期近代と個人化

先に述べたように、『ハマータウンの野郎ども』において少年たちが学校から職業へと移行する際、彼らは「反学校の文化」、すなわち自身の出身階級の文化を見事に実践していた。文化は集団を下部構造としない限り成り立たないとウィリスが断言したように (Willis 1977=1996)、1970年代当時は、移行そのものが労働階級コミュニティやインフォーマルな仲間集団を下部構造とする、労働階級の文化と結びついていた。すなわち当時の〈野郎ども〉は、労働階級文化や反学校の文化のもとで将来の職業生活を展望することが可能であった。あるいは、家父長制や男尊女卑を軸とした「男らしさ (masculinity)」を信奉し、立派な大人の男を職場の文化に求めることが可能だったのである。

しかし、1980年代以降の社会経済変容は多くの若者から上のような見通しを奪った。1970年代にはじまるグローバル経済の進行に付随して、流動的な資本主義は労働者に多大なリスク、不安定、職業アイデンティティの喪失などをおよぼすようになってきた (Bauman 1998=2008; Sennet 1998=1999; Beck 2000)。

こうしたなか、若者の移行過程の変容がヨーロッパ

でどのように捉えられてきたかについて整理しているのは、乾 (2010) である。彼は、「A. ギデンズ、U. ベックらの『後期近代 (late modern)』と『個人化 (individualisation)』などをめぐる理論は、ヨーロッパにおいて若者の移行過程変容の今日的な性格を理解するうえで、しばしば参照されてきた」(p.64) とし、これらの議論を次のように整理している。

ベックのいう個人化は、従来の社会の形式であった各種カテゴリー (階級、身分、ジェンダー役割、家族など) の解体・断片化という側面と、それによってモデルを失った諸個人に自身の生活を調整・管理することを求める側面とを包含する (Beck 2001)。こうした個人化は、現代社会のシステム上、諸個人を強制的に巻き込むものであるため「自分の生活と人生をコントロールする行為主体 (agency) としての個人への重要性への注目を促す」(乾 2010, p.74)。ここで、後期近代における行為主体をどのようにとらえるか、その理論化を試みてきたギデンズの議論 (Giddens 1991=2005) が重要になる。「彼の議論において一つのキーとなるのは、再帰性 (reflexivity) という概念である。再帰性とは行為主体が自己の行為の結果をモニタリングしながら、それを通じて自己のその次の行為をコントロールしていくことを指す」(乾 2010, p.78)。伝統的な共同性の消失を前提とし、ベックよりも行為主体としての個人を強調するギデンズによれば、自己が「再帰的プロジェクト」であるということは自己アイデンティティの保持がもたら諸個人による主体的な模索と構築活動=自己の再帰的な努力に依存するということを意味する。

#### (2) 現実：経験的研究の動向

しかし、こうした理論が現実をどれほど正確にとらえているかということについては、様々な見方がある。例えば H. ブラッドレイらは、こうした主張は必ずしも体系的な経験的研究にもとづいたものではないと指摘する (Bradley and Devadason 2008)。むしろ、ギデンズやベックの理論は「今日の先進国の若者たちの〈学校から仕事へ〉の移行とその背後にある問題の一つの側面を捉えるうえで有効な装置」ではあるが、「実際に起こっている変化は、彼らがいかに完璧なものでも全面的なものでもない」(乾 2010 pp.102-103)。

乾 (2010) は、移行過程に関するヨーロッパの実証的研究の知見を紹介しながら、先の理論的議論を相対化している。例えば、「徹底的に発展したモダニティの基礎単位は一人ひとりの個人である」というベックの主張に対し、S.J. ボールら (Ball, Maguire, and Macrae 2000) を引用して、若者たちの社会的見通しやアイデンティティ形成に家族の重要性を指摘し、ま

た彼らの間の進路格差が明らかに階級的な格差として表れていると指摘する。あるいは、行為主体の重要性の高まりが階級秩序そのものを変容させつつあるという明確な主張を展開している研究者としてM. デュボア＝レーモンを挙げ、彼女が注目する「若者文化資本(youth cultural capital)」(Du Bois-Reymond 2005)を紹介している。それは、従来の家族を通じて伝達される資本ではなく非制度的な同輩関係を通じて獲得される、ゆえに若者において出身階級からの制約を減退させうる資本であるという。たしかに、若者文化については消費文化の影響力の増大とともに階級間の差異が曖昧化していることが共通認識になっている(Furlong and Cartmel 2007=2009)。しかしながら、K. ロバーツらが主張する「構造化された個人化(structured individualization)」(Roberts, Clark and Wallace 1994)や、その議論を発展させたA. フェーロングらの「認識論的誤謬(epistemological fallacy)」(Furlong and Cartmel 2007=2009)などの議論にみられるように、多くの研究者は階級的制約が大きく変化したということに懐疑的であるという<sup>4)</sup>。

後期近代の理論を「共同性のないアイデンティティは可能か?」と相対化する乾(2010)は、一方で若者個人とネットワークやコミュニティとの関係を重要視する。ギデンズらは、個人化の進行に際し、アイデンティティの維持はコミュニティから切り離された個人の自己再帰性によるものとした。しかし、近年の実証研究はむしろ、若者のネットワークやコミュニティに着目してその重要性を指摘するようになってきているという。すなわち、「伝統的コミュニティが大きく動揺し、断片化されているとはいえ、コミュニティは消滅したわけではなく、多様な形態で存続しあるいは新たに生まれている。(中略)断片化し多層化したコミュニティと若者たち一人ひとりとの関係を丁寧に見ることが求められている」(乾 2010, pp.112-113)のである。

#### 4. 〈野郎ども〉の今日的諸相

以上、欧米の若者による職業への移行、大人への移行の特徴に関する理論的、経験的研究を概観した。そこには、欧米の若者の移行を捉える際に後期近代の概念および個人化の進行という理論枠組みがしばしば参照されてきたという側面と、しかし依然として若者の有するコミュニティが彼らの職業移行やアイデンティティに大きく影響しているというマクロな実証分析の結果が存在していた。では、以上の社会経済変容およびそれが導いた若者の課題を、今日の野郎どもはいかに経験しているのだろうか。

##### (1) グローバル化と労働階級の若者たち

今日の学校、仕事、階級、資本の関係の理論化、また、若者たちの学校・仕事上のアイデンティティを理解するための理論構築を目指す際に、グローバルな再配置の進行を看過することはできない(Dolby and Dimitriadis, 2004)。かつてウィリスは、国家と経済、そして学校との間に強い関係を想定していた(Willis 1977=1996)。しかし、経済と教育のシステムが国家的な文脈を脱しグローバル化に巻き込まれるにつれ、そのようなつながりはもはや強いものではなくなった。ウィリスの階級再生産に関する理論は、肉体労働の衰退、労働のサービス業化によって再考を余儀なくされることとなったのである(Arnot 2004)。

経済構造の変容と肉体労働産業の衰退は、工場で働く父親を持つ少年たちにとって衝撃的であった。父親の仕事と同じような仕事がなくなると、少年たちは「本当の仕事(real work)」への期待をなくしてしまった。若年労働市場の崩壊や工場労働から新しいテクノロジーへの転換、加えてサービス産業の拡大。これらすべてが、少年たちの学卒後雇用機会に根本的な影響をおよぼした。野郎どもは、伝統的な見習いや縁故によるコネといった従来の学校から職業への移行をもはや期待していないのである(以上、Arnot 2004)。

では、「本当の仕事」をなくした労働階級の若者たちは、今日の社会・経済状況をいかに経験しているのだろうか。先に述べたように、かつては学校を卒業し労働に従事するようになることが少年から大人への移行を意味していた。1970年代前半という完全雇用の時代の野郎どもは、最低年齢で学校を卒業し、職に就き、賃金を稼ぎ、世帯に貢献するという労働階級に規範的な移行パターンを追求することが可能だったのである(Jones and Wallace 1992=1996)。ところが、ウェイターや公務員、バーの店員、コール・センターや単調なサービス業で満たされた今日の世界において、労働階級の少年たちはいかに大人への移行を成し遂げようとするのか、という問題が顕在化してきている(Nayak 2003, 2006)。先行研究のなかには、そうした労働・移行環境の変化における困難を自明のものとして受け入れる若者像＝「適応世代」(Bradley and Devadason 2008)を提出するものも認められるが、果たして労働階級の少年たちはみな現在の状況に適応しているのだろうか。あるいは、「個人化」「自己の再帰的プロジェクト」や伝統／新興のコミュニティや社会的カテゴリーの問題を、今日の野郎どもの移行過程と生活世界においてどのようにとらえればよいのだろうか。この問いは、マクロな視点での調査研究や理論研究によって説明されてきた現代社会を、「生きられるもの」と

してミクロな視点から描き直すという課題を提示している。

## (2) サービス産業時代の〈野郎ども〉

J. ケンウェイらは、脱工業化する地域経済に対する少年たちの反応について、オーストラリア内の2地域を調査している (Kenway and Kraack 2004)。当該地域の男性はこれまで、仕事をうまく、バリバリとこなしそこそこの賃金を得ること—「ハードな仕事を首尾よくこなすことで一目置かれること」(Willis 1977=1996, 筆者訳)—によって尊敬と評判を獲得し、家族を養うことを規範的な男らしさ (masculine imperatives) としてきた。しかし、近年のサービス産業化=「女性化された労働 (feminized work)」の増加は、地域の労働階級の仕事を不安定化させ、男たちから自信を奪うこととなった。その結果、労働階級少年たちはもはや「本当の仕事」に就くことができず、労働階級の男らしさの再生産は破綻してしまったのである。

ところが、ケンウェイらの調査地域のひとつでは、そこに根づく男らしさの観念はそれを支える経済基盤を失ったにもかかわらず健在であった。白人労働階級の少年たちは、なるだけ早く学校を離れて事務方仕事でない仕事を求めている。ハマータウンの野郎どものようには労働世界を歩めないとしても、彼らは新たな教育的・経済的要求に合わせて自己を再構築することには拒絶的である。男らしさや労働に伝統的なまなざしを向け、それとは異なる男性像を模索することはない。そうした伝統的な男が今では「お払い箱」「使い物にならない」ものとして表象されよう。

他方、もうひとつの調査地域—より多様でダイナミックな文化—に新しい男らしさの片鱗を認めることもできる。そこには、労働階級という概念をイデオロギカルに残しながらも観光産業や接客業に身をゆだねていく若い男性たちが関わっている。彼らは、当該地域において伝統的でない仕事を、しかしジェンダー的な言い回しで伝統的なものと再定義する。つまり、それらの仕事のより男らしい側面を取り上げて語ったり、彼らが従事する女性的労働を男らしいものとして再構築するのである。このことは、地域の階級コミュニティのなかでなされてきたアイデンティティの形成と維持が、地域のマクロな構造的変容に対応して再帰的に達成されつつあることを示唆しているといえよう。

乾 (2010) は、「アイデンティティの形成・維持のほとんどが再帰性にのみ回収されるわけではない」(p.113) とギデンズを批判し、若者個人とコミュニティとの関係に注目する必要性を説いている。しかし、こうした議論が個人的な「自己の再帰的プロジェクト」

か、それともコミュニティの影響力かという、二項対立のパースペクティブをほらむ可能性には注意しなければならない。むしろ、ケンウェイらの調査研究からわれわれが読みとるべきことは、個人をコミュニティのメンバーととらえ、彼らによる再帰的な営みが彼らの生きるコミュニティや世界において意味するところを検討する必要性である。

## (3) 少年から大人の男へ：「身体の再帰的实践」

このように課題を設定するとき、A. ナヤックによる研究が興味深い。彼の関心は、それまで豊富だった労働者階級の仕事が消滅し脱工業化経済が広がる不安定な時代を、労働階級の若者たちはいかに生きているのかということにある (Nayak and Kehily 2001)。

この課題にアプローチする際にナヤックが目にしたのは、労働階級少年の仲間集団に共有されたサブカルチャーがもつ意味である (Nayak 2006)。ナヤックは、戦後イギリスの労働者雇用を支えた工業が1980年代を通じて衰退し、構造と文化のレベルの大きな変容を導いたと同時に、大人と職業世界への進路を急速に変化・多様化させてきたとする。ここで彼は、先に紹介したベックの議論に乾 (2010) とは少し異なった側面に注目している。つまり、後期近代におけるリスクは階級社会を撤廃するのではなく、強化するのであり、むしろ大量の非正規雇用はさらに個人化した労働経歴とリスクの高い生活軌道を導く様々な不完全雇用の新たなかたちへと変わりつつあるということである (Beck 1986=1998)。ナヤックは、このような経済側の変動にともなう文化変動のなかで揺らぐ地域的な階級アイデンティティを、若者が創りかえ再構築していくその具体的様相を彼らのサブカルチャーに見出している。

ナヤックの調査は、イングランド北西部の都市における2つの少年グループ (熟練労働者家庭出身者と長期失業家庭出身者) に対し学校や市街地など様々な場所で実施された。調査の焦点は、少年たちの余暇の生活スタイルや、仲間集団や学校教育から労働の世界へと移行しようとするにつれ増加する脆弱で複雑、かつ矛盾的な選択におかれていた。調査が行われた地域は、1970年代まで造船、石炭鉱業、重機械工業と結びつき、歴史的には経済資源に富んで繁栄してきた。この地域の光景は、しかしながら1980年代の連続的坑道閉鎖によって一変した。世界的に名高い造船業においても、競争的な世界経済や貧しい経営状態、市場に対する負の投資や過剰生産によって合理化が進行した。さらに、労働階級の男くささを払拭しようと「再ブランド化 (re-branded)」が進行し男らしさの社会基盤が消滅するにつれ、それは新たな文化産業 (ナイトクラブやレ

ストラン、カフェ・バーなど)に取って代わられたのである。

「坑道からクラブへ」という変容は、物質的光景と地域的なアイデンティティに大きな影響を及ぼした。ソフト経済がこの地域の経済基盤を変え、女性労働力の増大が労働市場における性役割を大きく変容させた。一方で、「煩わしさ」「非体制者」「反抗」で特徴づけられてきた労働階級男子の身体・タフネスを通じて蓄積される資本であり、もっともおなじみの階級指標—は今、失業のリスクに適応しなければならなくなった。

本稿では、ナヤックが調査した集団のひとつ、自称「真のジョーディー (*Real Geordies*)」たちの経験や世界に注目したい<sup>5)</sup>。真のジョーディーとは、新しいカフェやバー、ナイトクラブに馴染んだ白人の若年男子集団である。彼ら「地元の野郎ども (*local lads*)」が共有する家族の労働史 (白人の男らしい肉体労働の遺風) は、彼らに独自の価値観、解釈、実践を生む基盤となる。ジョーディーの語源は、地元民を示すものであるとか、炭坑夫に与えられた名称であるといわれている。しかし、大人と職業世界への進路が急速に変容し多様化・混迷化している現在、もし真のジョーディーが文字通り職業的な意味においてもはや「真」でありえないとしたら、このアイデンティティはいかに、何のために、何を意味して用いられるのであろうか。

真のジョーディーたちは、仲間たちと「飲み屋をしごくる (*circhit drinking*)」(Hollands 1995) ことで享楽主義=労働階級の伝統、地元の白人男性らしさを維持・復活させ、究極的に創りかえていた。彼らは、スーパーマーケットなどのパートタイム労働で懸命に稼いだ「なげなげな」金銭を、しかしそれに矛盾するように多くの飲み屋に顔を出し労働階級文化の伝統的基盤へ投資し続ける。さらに、飲み屋で交わされる喧嘩やフットボール、性的行為についての逸話は彼らの集団の日常を構成している。これら一連のサブカルチャーは、職場以外の場で工業期の男らしい文化の形式を取り戻すことを意味し、彼ら個人に生まれつき備わっていない「身体の再帰的实践 (*Body-reflexive practices*)」(Connell 1995) として理解されるべきものであった。しかしながら、ジョーディーの意味がかつて「生産」(炭鉱や工場)の過程と結びついていた場所は、新たなサービス経済のなかで「消費」のアリーナ (飲酒、クラブ通い) に取って代わられた (Hollands 1995)。

「本当の仕事」を欠いた真のジョーディーたちは、家族のなかに刻み込まれ、仲間内で共有されるかつての職業文化の暗黙の形跡を成立させているように思わ

れる。たしかに、伝統的な「立派な男 (*Respectability*)」の面影にすぎりつつ変化の先端で自身の階級の不安定を露呈させる彼らを、「支配的な男らしさ (*dominant hegemonic masculinity*)」の担い手というには無理がある。それでもジョーディー・アイデンティティは、工業期の労働階級文化を再構築する新しい実践の中で息を吹き返した。また、そうした自己認識の基盤となる同質な仲間のネットワークおよび家族は、安定を提供し、期間は曖昧だがより融通のきく若者の移行を支えている。肉体労働は相続できなかったものの、こうしたコミュニティやネットワークのなかで彼らは「黄金の過去 (*golden past*)」と自分とを重ね合わせながら真のジョーディーとして少年から大人へ、社会へと移行してゆく。つまり、職業的な移行が困難な現代において、文化的な大人への移行がサブカルチャーの実践を通して再帰的に達成されるのである。

## 5. おわりに

欧米の理論的研究では、近代型コミュニティの崩壊とともに、「個人化」(Beck 2000) や「自己の再帰的プロジェクト」(Giddens 1991=2005) といった概念が一定の関心を集めてきた。しかしその一方で、経験的研究の関心は必ずしも個人へのみ払われているわけではない。階級、人種、ジェンダーといった社会的カテゴリーへの注目は依然として根強い。そうした変数がもともと重要視されてきたという欧米各国の社会的・歴史的背景の影響もあろう。しかし、特定の若者層に共有された価値観や生活様式を解釈する文脈を与えてくれるコミュニティやインフォーマル・グループへの今日的関心は、いまや新しい課題を提示している。

現在の労働階級出身の若者たちは、マクロな構造変容 (新自由主義経済やサービス業化する労働市場) のなかで、職業への移行とともに地域的な労働階級アイデンティティの再構築を迫られており、そのなかで少年から大人への移行を成し遂げなければならない。本稿では、こうした現実と直面する今日の野郎どもの経験に対して、彼らのサブカルチャーに注目し、個人の再帰的实践、地域の階級コミュニティやインフォーマルな集団、アイデンティティという3つの事象を有機的にとらえるナヤック (Nayak and Kehily 2001, Nayak 2003, 2006) のミクロな視点とアプローチに注目した。少年たちのアイデンティティ形成や社会への移行過程において出身階級コミュニティの労働史や文化が参照されていたように、特定の社会層には彼ら固有の移行・社会化過程がひらかれている。加えて、それがいかなるものかということは、地域やコミュニティの

社会的経済的文脈を理解し、現在の若者の実践に寄りそうことで明らかになる。こうしたアプローチは、階級文化のミクロなダイナミクスに対する関心 (Willis 1977=1996) を継承しつつ、それを今日のマクロな文脈に据え直すという重要な課題を提起しているのである。

ひるがえって、日本においても学校から職業への移行のみならず、若者が大人になる、自立するうえでの困難が指摘されている (宮本 2002; 中西・高山編 2009)。しかしながら、労働世界の状況と若者たちのコミュニティ、彼らのアイデンティティをめぐる複雑な相互関係をサブカルチャーに見出し、その上で若者の移行過程を論じた研究は決して多くない。筒井・阿部 (2008) は「配管工」「大工」の世界へのフィールドワークから、「ヤンキー文化」と親和性をもちその再生産に寄与してきたブルーカラー労働における「職人」像の変容を指摘した。その上で、このことが今日のヤンキー文化の衰退を導いており、さらに新しい職人像に対応した新たな若者文化が生まれてくる可能性を論じている。ここでは若者の労働とサブカルチャーが関連づけられているものの、ブルーカラー労働という特定世界に生きる若者のインフォーマルな仲間集団の諸相や、そこで展開される「身体の再帰的实践」といったミクロな過程は看過されている。この意味で、残念ながら「階層によって異なる社会化のあり方という認識を日本にあてはめた議論はほとんど存在していない」(高山 2009, p.367)<sup>6)</sup>。もちろん、欧米社会を説明するための概念 (階級や人種など) をそのまま日本に持ち込むことはできない。そうではなく、本稿は、各地域社会の文脈をふまえたうえで、若者のサブカルチャーに自己再帰性/コミュニティ/アイデンティティをとらえる枠組みの可能性を主張する。労働世界への参入は何を意味し、大人になる、社会に出るというのはどういうことなのか。これらの意味を若者それぞれの世界や物語から紡ぎだし、多様な生活世界における多様な社会への移行のあり方が明らかにされなければならない。

## 【註】

- 1) 高等教育機関への進学希望者が通ったグラマー・スクールと異なり、セカンダリー・モダン・スクールは職業教育の比重が高く、いわば就職する労働階級少年のための中等学校であった。
- 2) このようなウィリスの分析には、ジェンダーや人種のダイナミクスを軽視し (Dolby and Dimitriadis, 2004)、またそのことで野郎ども自前の性差別的なステレオタイプを強化している (McRobbie 1991)

という批判がある。それに対して近年では、C. ジャクソンをはじめ、女性版の野郎ども (ladette) に関する研究がなされている (Jackson 2002, 2006ab)。あるいは、M. アシュレイはバレエを習う労働階級少年の語りを解釈し、白人労働階級少年=不良な野郎どもという言説に異議を唱えている (Ashley 2009)。

- 3) ところが、これらの洞察は「常識」やイデオロギーからの影響=制約) によって「形成の途上ですでにねじ曲げられ、矛先をそらされ、かたちをゆがめられてしまう」(Willis 1977=1996, p.294)。彼らの洞察は十全な発展を遂げることなく「部分的な洞察」へと押し込められ既存の体制へつなぎとめられる。この点で彼らは資本制社会における階級構造の再生産に寄与してしまう。しかしウィリスが強調したのは、「支配イデオロギーの受動的な担い手にとどまりえないのであり、既存の社会構造を再生産するにしても、闘争や抵抗や部分的な洞察を行う、イデオロギーに対する能動的な改竄者」(p.409) としての野郎どもだった。
- 4) 認識論的誤謬とは、若者の多様化した移行、およびその過程における種々の困難を自己責任の問題として受け入れ不安を募らせる主観が、しかし一方で、依然として階級や人種、ジェンダーといった社会構造が個々人の生活と人生に大きく影響していることを示す客観的データと乖離していることを表現するものである (Furlong and Cartmel 2007=2009)。
- 5) ナヤックが調査したもう一つの若者グループは「チャブ (Chav)」と呼ばれる長期失業家庭出身の若者たちである。チャブとは、ストリートスタイル (キャップ、スウェット、トレーナー、ジャラジャラした金色のアクセサリー) で独特の歩き方 (猿のように前かがみでゆっくりとした大股の足取り) をする若者たちである。チャブは金銭の欠如とその粗野なスタイルによって正規のナイトタイム経済から排除されている一方で、ストリートの文化に身を染めるという身体の再帰的实践によってアイデンティティを達成している。また、真のジョーディーたちはチャブ達を蔑視しているが、そうした差異化も彼らのアイデンティティ形成に明確に寄与している (Nayak 2006)。
- 6) マイノリティ研究における社会化・就職問題は多く論じられてきたが、今後はそうした「社会階層」だけでなく、多様化し多元化する若者層や労働世界に固有の移行のあり方を想定する必要があるだろう。

## 【引用参考文献】

- Arnot, M., 2004, "Male Working-Class Identities and Social Justice: A Reconsideration of Paul Willis's Learning to Labor in Light of Contemporary Research" in Dolby, N. and Dimitriadis, G. with Willis, P. Eds., *Learning to Labour in New Times*, RoutledgeFalmer.
- Ashley, M., 2009, "Time to Confront Willis's Lads with a Ballet Class? A Case Study of Educational Orthodoxy and White Working-class Boys" *British Journal of Sociology of Education*, 30(2), pp.179-191.
- Ball, S. J., Maguire, M., and Macrae, S., 2000, *Choice, Pathway and Transition Post-16: New youth, new economies in the global city*, London: Routledge.
- Bates, I., 1984, *Schooling for the Dole? The New Vocationalism*, London: Macmillan.
- Bauman, Z., 1998, *Work, Consumerism and the New Poor*, Cambridge: Polity Press (=2008, 伊藤茂訳『新しい貧困-労働, 消費主義, ニューブアー』青土社).
- Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会-新しい近代への道-』法政大学出版局).
- Beck, U., 1992, *Risk Society: Towards a New Modernity*, London: Sage.
- Beck, U., 2000, *The Brave New World of Work*, Cambridge: Polity Press.
- Beck, U., 2001, "Losing the Traditional: Individualization and 'Precarious Freedoms', in Beck, U., and Beck-Gernsheim, E., *Individualization*, London: Sage.
- Bradley, H. and Devadason, R., 2008, "Fractured Transitions: Young Adults' Pathways into Contemporary Labour Markets" *Sociology*, 42(1), pp.119-136.
- Connell, R. W., 1995, *Masculinities*, Cambridge: Polity Press.
- Dolby, N., and Dimitriadis, G., with Willis, P. Eds., 2004, *Learning to Labour in New Times*, RoutledgeFalmer.
- Dolby, N., and Dimitriadis, G., 2004, "Learning to Labour in New Times: An Introduction" in Dolby, N. and Dimitriadis, G. with Willis, P. Eds., *Learning to Labour in New Times*, RoutledgeFalmer.
- Du Bois-Reymond, M. and A. Lopez Blasco, 2003, "Yoyo Transitions and Misleading Trajectories: From Liner to Risk Biographies of Young Adults" in A. Walther, A. Lopez Blasco and W. McNeish Eds., *Dilemmas of Inclusion; Young People and Policies for Transitions to Work in Europe*, Bristol: Policy Press.
- Du Bois-Reymond, 2004, "Youth-Learning-Europe: Menage a Trois?" *Young*, 12(3), pp.187-204.
- Furlong, A. and Cartmel, F., 2007, *Young People and Social Change*, 2nd ed., Buckingham: Open University Press (=2009, 乾彰夫・西村貴之・平塚眞樹・丸井妙子訳『若者と社会変容』大月書店).
- Giddens, A., 1991 *Modernity and Self-Identity*, Cambridge: Polity Press (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社).
- Griffin, C., 2005, "Whatever Happened to the (Likely) Lads? Learning to Labour' 25 Years on" *British Journal of Sociology of Education*, 26(2), pp.291-197.
- Hebdige, D., 1979, *Subculture: The meaning of Style*, London: Methuen (=1986, 山口淑子訳『サブカルチャースタイルの意味するもの-』未来社).
- Hollands, R., 1990, *The Long Transition*, Basingstoke: Macmillan.
- Hollands, R., 1995, *Friday Night, Saturday Night: Youth Cultural Identification in the Post-industrial City*, Newcastle: University of Newcastle upon Tyne.
- 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち-個人化・アイデンティティ・コミュニティー-』青木書店.
- Jackson, C., 2002, "'Laddishness' as a Self-worth Protection Strategy" *Gender and Education*, 14(1), pp.37-51.
- Jackson, C., 2006a, "'Wild' Girls? An Exploration of 'Ladette' Cultures in Secondary Schools" *Gender and Education*, 18(4), pp.339-360.
- Jackson, C., 2006b, *Lads and Ladettes in School: Gender and Fear of Failure*, Open University Press.
- Jones, G. and Wallace, C., 1992, *Youth, Family and Citizenship*, Buckingham: Open University Press (=1996, 宮本みち子監訳・鈴木宏訳『若者はなぜ大人になれないのか-家族・国家・シティズンシップ-』新評論).
- Kenway, J. and Kraack, A., 2004, "Reordering Work and Destabilizing Masculinity", in Dolby, N. and Dimitriadis, G. with Willis, P. Eds., *Learning to Labour in New Times*, RoutledgeFalmer.

- McDowell, L., 2000, "Learning to Serve? Employment Aspirations and Attitudes of Young Working-class Men in an Era of Labour Market Restructuring" *Gender, Place and Culture*, 7(4), pp.389-416.
- McDowell, L., 2001, *Young Men Leaving School: White Working-class Masculinity*, Leicester: National Youth Agency in association with Joseph Rowntree Foundation.
- McDowell, L., 2002, "Transitions to Work: Masculine Identities, Youth Inequality and Labour Market Change" *Gender, Place and Culture*, 9(1), pp.39-59.
- McRobbie, A., 1991, *Feminism and Youth Culture: From Jackie to Just Seventeen*, Boston: Unwin Hyman.
- 宮本みち子, 2002, 『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社.
- 中西新太郎・高山智樹編, 2009, 『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ—』大月書店.
- Nayak, A., 2003, "‘Boyz to Men’: Masculinities, Schooling and Labour Transitions in De-industrial Times" *Educational Review*, 55(2), pp.147-159.
- Nayak, A., 2006, "Displaced Masculinities: Chavs, Youth and Class in the Post-industrial City" *Sociology*, 40(5), pp.813-831.
- Nayak, A. and Kehily, M. J., 2001, "Learning to Laugh: a Study of Schoolboy Humour in the English Secondary School" in W. Martino and B. Meyenn Eds., *What About the Boys?: Issues of Masculinity in Schools*, Buckingham, Open University Press.
- Roberts, K., 1995, *Youth and Employment in Modern Britain*, Oxford: University Press.
- Roberts, K., Clark, S. C., and Wallace, C., 1994, "Flexibility and Individualization: A Comparison of Transitions into Employment in England and Germany" *Sociology*, 28(1), pp.31-54.
- Sennet, R., 1998, *The Corrosion of Character: The Personal Consequences of Work in the New Capitalism*, London: W. W. Norton (=1999, 斎藤秀正訳『それでも新資本主義についていくか—アメリカ型経営と個人の衝突—』ダイヤモンド社).
- 高山智樹, 2009, 『『ノンエリート青年』という視点とその射程』中西・高山編『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ—』大月書店.
- 筒井美紀・阿部真大, 2008, 「文化は労働につれ, 労働は文化につれ—ヤンキー文化とブルーカラー労働の相互関係を事例に—」広田照幸編著『若者文化をどうみるか?—日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する—』アドバンテージサーバー.
- Willis, P., 1977, *Learning to Labour: How Working Class Boys Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing Limited (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房).
- 山本雄二, 1988, 「自己訓育と教育関係—『ハマータウンの野郎ども』を読む—」『教育社会学研究』43, 70-83頁.

(主任指導教員 山田浩之)